



◎ 映画の中の図書館
 (人文学部教授 藤田 秀樹) …………… 1

◎ ニュース
 ○ 遠山文部科学大臣がヘルン文庫
 を見学…………… 3
 ○ 中学生が図書館業務を体験…………… 4

◎ 案 内
 ○ 本館貴重図書を紹介(その1) …………… 4
 ○ 本学教官執筆図書案内…………… 6
 ○ 図書自動貸出装置の利用…………… 6
 ○ 留学生用情報端末機を設置…………… 6

◎ その他
 ○ 図書館関係会議…………… 7
 ○ 平成14年度附属図書館運営委員会委員名簿
 (平成14年9月現在) …………… 7

映画の中の図書館

人文学部教授 藤田 秀樹

図書館報にどのようなものを書いたらいいのかと思案に暮れたあげく、たとえ少々強引でも、自分の関心のある領域に話を引き寄せるしかないという結論に達した。学生時代から、授業をさぼってはよく映画館通いをしていた。その怠惰な学生が何の因果か教職を生業とするはめになってしまったが、長年親しんだ道楽を仕事にも活用しない手はないとあざとく考え、映画を授業の教材として使ったり、最近では書き物のネタにしたりしている。

さて、標題のような視点からこれまで自分が見たことのある映画を思い起こしてみると、特に欧米の作品の中に興味深いものが少なくない。以下、特に記憶に残るものを二三挙げてみることにする。

比較的新しい映画では、『セブン』が印象的だった。猟奇的な連続殺人事件の動機の手がかりを求めて、老刑事サマセットは、バッハの管弦楽組曲が流れる深夜の図書館で黙々と文献を漁る。自分が担当する、ソドムとゴモラのような悪徳と退廃に満ちた街からタクシーに乗って図書館に向かう時、彼は行き先を尋ねる運転手に、“Far away from here.”(ここからずっと離れた所へ)と答える。この言葉には、単なる地理的・空間的次元にはとどまらない意味がこめられているだろう。凄惨な殺人現場や腐臭が漂うような街の風景とは対照的に、知的静謐に包まれ、サマセットが“a world of knowledge”(知の世界)と呼ぶこの図書館は、塵界から隔絶した聖所のような趣き

を呈している。

図書館が描かれている映画の中で最も印象的な作品は、やはり『薔薇の名前』であろう。14世紀初めの北イタリアの修道院が舞台だが、そこには「キリスト教圏最大の図書館」が付設されている。この図書館、とりわけそこに収められた一冊の書物が、物語の展開の基軸となっている。そしてその書物に翻弄される中心的な登場人物たちには、書物が具現する知というものに対する様々なスタンスを反映するような人物造型が施されている。問題の書物をめぐって起こる奇怪な死の連鎖のなぞを解明しようとするウィリアム修道士は、近代の分析的知性を先取りする一方で、中世的な視点から見れば、知的高慢の罪（作中で“intellectual pride”という言葉が使われている）を犯した人物でもある。いわば彼は、貪欲なまでの知の探求者である。一方ウィリアムの敵対者であり、図書館のヌシのような存在のホルヘ修道士は、過剰な知は信仰を揺るがし世界をカオスに変えてしまうと信じ、知とは単に保存すべきもので探求するものではない、と公言する。最初この映画を見た時には、この異形の修道士は中世的な迷妄を体現するような人物に思えたが、その後何度か見直すうちに、もともとはウィリアムに劣らず書物を偏愛し、やがて書物が人間の精神に及ぼしうる強大な影響力やエネルギーを洞察し、魔を封ずるよう

その力を迷宮のような図書館に封じ込めようとしているのではないか、と思うようになった。ウィリアムの弟子のアドソも興味深い。食物を求めて修道院内に忍びこんだ貧民の娘と思いがけず性的な関係を持ってしまったため、彼は師との純粋に知的な交流を通しては知り得ない世界に目を開かれる。その結果、2人の間には微妙な隔たりが生じる。2人が図書館内部に忍び込んだ際、アドソがたまたま開いた書物に描かれた女性の身体図に心を奪われているうちに、膨大な蔵書に興奮し図書館の奥へと、言わば知の迷宮の内奥へと突き進んでいく師とはぐれてしまう場面は、この隔たりを暗示しているように思える。物語のクライマックスにおいて、修道院の外で行われる異端者の火刑と同時進行で、図書館が炎上する。人類の貴重な知の遺産が焼失していくのを、なすすべもなく呆然とみつめるウィリアムの姿が印象的である。

紙数に限りがあるためごくわずかな作品にしか言及できなかったが、膨大な情報知の集積所であり、多様な動機からその情報知を求めて多様な人々が集まる空間である図書館は、物語が生成されやすい空間でもあるのかもしれない。それにしても、映画の中の図書館という主題は意外と面白いものに思える。来年あたりに授業で使ってみようか、などと抜け目なく企んでいる。



遠山文部科学大臣がヘルン文庫をご見学

去る平成14年9月4日、遠山文部科学大臣が本学を視察され、附属図書館本館5階にあるヘルン文庫をご見学になった。大臣は、ヘルン文庫について四津図書館専門員から次のとおり説明を受けられた。

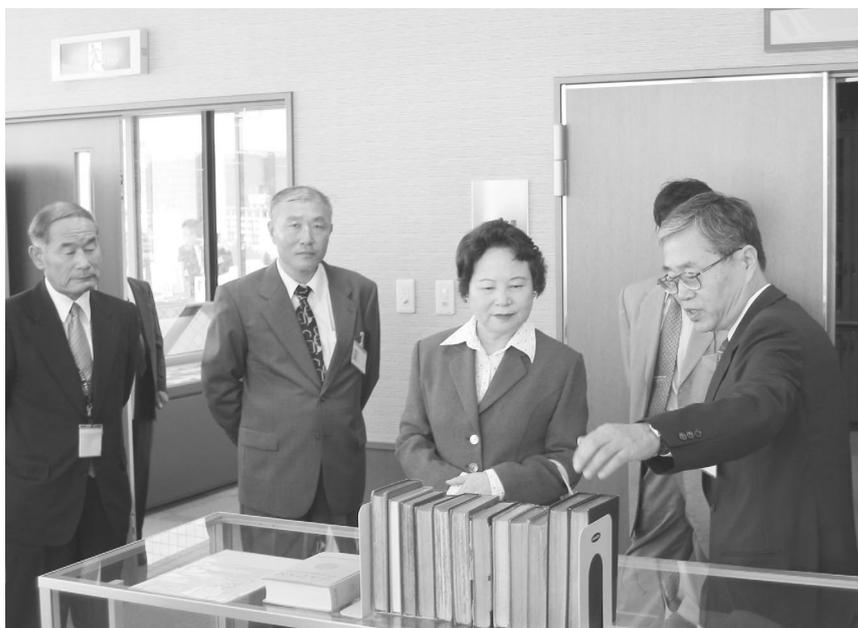
このヘルン文庫は、小泉八雲が所蔵していた蔵書を文庫としたものであるが、旧制富山高等学校の初代校長に就任が予定されていた南日恒太郎氏が、大正12年11月に、実弟でもありハーンの高弟でもあった田部隆次氏から、ハーンの蔵書をどこか一括して保管できる大学に譲渡してもよいとの小泉家の意向をお聞きになった。南日氏は、翌大正13年に開設予定の同校が文化の中心になる機縁になることを願って、小泉家からの譲渡を田部隆次氏を通し依頼され、同時に富山市東岩瀬の素封家馬場はる氏に資金の提供を依頼された。そしてこれらハーンの蔵書は、翌大正13年6月10日の同校開校記念日に開校記念として馬場家から寄贈され、「ヘルン文庫」と称し開設された。その後、当文庫は新制富山大学に移管され、現在に継承されている。

文庫書棚に配架されている2,435冊の図書は、大半はハーンが生前に収集した図書であり、英語図書、仏語図書、日本で主に妻のセツさんが買い求めた和漢書から構成されており、学問大系に沿ったコレクションとして評価の高い蔵書である。

説明後、旧制富山高校時代に分類された図書内容に従い配列されている蔵書の内、ハーンの著作活動に多大の影響を与えたとされる作品を数冊ご紹介した。

晩年のハーンが日本を紹介するために集大成した著作、通称「神国日本」の直筆原稿を間近にご覧になった際には、端正にペン書きされた1,200枚の原稿に感嘆され、また、展示ケースに納められているハーンに関する和装本の展示資料等は、ご持参の拡大鏡を使い熱心にご覧になられた。

ヘルン閲覧室には、展示ケース上にハーンが日本で生活した14年間に海外で出版した13冊の図書が配置されており、中でも、最初に出版された「知られぬ日本の面影（下巻）」に収載されている「The Japanese Smile（日本人の微笑）」は、日本人の性格の特性を海外に紹介した作品として有名であることの説明には、大臣には既知のこととして頷いておられた。



専門員から説明を受けられる遠山大臣

中学生が図書館業務を体験

— 社会に学ぶ「14歳の挑戦」で、図書館業務を体験 —

去る7月8日(月)～12日(金)の5日間、当館において、富山県教育委員会が実施する「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」事業の趣旨に基づき、市内の中学生が職場体験を行いました。今年で4回目になるこの事業には、今年度も富山市立西部中学校から協力依頼があり、男子生徒5名、女子生徒3名の計8名が図書館業務を体験しました。

はじめに山地図書館長から、現在はインターネット等で世界の情報をリアルタイムで得ることができる時代である。図書館の利用形態も変化していくと考えられるが、図書館の仕事は外部から見ていてもなかなかわからないことが多いので、業務を体験しながら図書館の重要性を理解してもらうとともに、将来の仕事の参考になれば幸いであるとの挨拶があり、引き続き、図書館の仕事の概要説明および館内見学を行いました。

2日目以降は、オンラインによる国内外の図書館の蔵書を検索したり、図書館サービス業務のう

ち、図書の配架整理、現物貸借、文献の複写サービスなどを体験してもらいました。パソコンで他大学の図書館と図書資料に関する情報のやり取りを行っていることや、図書の配架、貸出図書の発送、文献の複写など、初めての体験にとまどいながらも一生懸命に取り組む姿が印象的でした。



データの検索を教わる中学生

案内

図書館貴重資料の紹介（その1）

— 川合文書について —

川合文書は、藩政期に砺波郡戸出村（現高岡市戸出）に居住した十村（大庄屋）川合家に伝来した文書である。加賀藩領内農村、特に越中の農村の基礎的史料であり、農政史・農村史研究における重要史料のひとつである。

当文書は、昭和二年（1927）に、富山大学の前身のひとつである高岡商業学校に譲られたが、新制大学の発足による吸収・合併に伴い、富山大学附属図書館の所蔵するところとなった。

川合家は、十村制創生期から藩政末期まで累代十村役を務めた加賀藩内でも有数の十村役家であ

るため、各代の役職等は以下の通り、ごく簡略にまとめることとする。

初代又右衛門は、出身地・素性等不明の人物であったが、藩政初期には砺波郡下中条村に居住するこの地域の最有力農民であった。二代又右衛門は、慶長九年（1604）に十村制が設立された当初から十村役に就任している。また、戸出野の新開が藩から許可されるとともに、戸出新村の町立てを行い、自らも戸出へと居を移している。三代又右衛門は、承応元年（1652）に無組御扶持人十村となり、貞享三年（1686）に御旅屋（藩主の休息

所・宿泊所)を拝領し、以後川合家の屋敷となった。四代又八は、射水郡十村・二塚村又兵衛家から養子に入った。延宝八年(1680)に^{せりだにのようすい}芹谷野用水を完成させ、砺波郡・射水郡の新田開発を助け、貞享四年(1687)に無組御扶持人となった。五代又右衛門は、正徳四年(1714)に御扶持人並となり、享保五年(1720)には先祖の扶持高を相続した。また、享保七年(1722)に能登天領(幕府の領地)が加賀藩に預けられた際に、引渡し役を仰せ付かっている。六代又八は家督相続後すぐに死亡したので省略する。七代又八は、元文五年(1740)無組御扶持人十村並となった。八代又右衛門は、宝暦十一年(1761)に名代誓詞を命じられているが、明和三年(1766)に若死にした。九代又右衛門は、七代又八の二男で養子に出されていたが、兄の夭逝により実家に呼び戻された。明和七年(1770)に無組御扶持人十村並となり、安永五年(1776)に射水郡へ加役御用を命じられている。十代又八は、寛政十一年(1799)に砺波郡平十村、享和元年(1801)に御扶持人十村並、文化五年(1808)に無組御扶持人十村となったが、文化十一年(1814)に退役を命ぜられ、文化十四年(1817)に帰役、文政二年(1819)には十村断獄により退役、能登へ流刑となる。

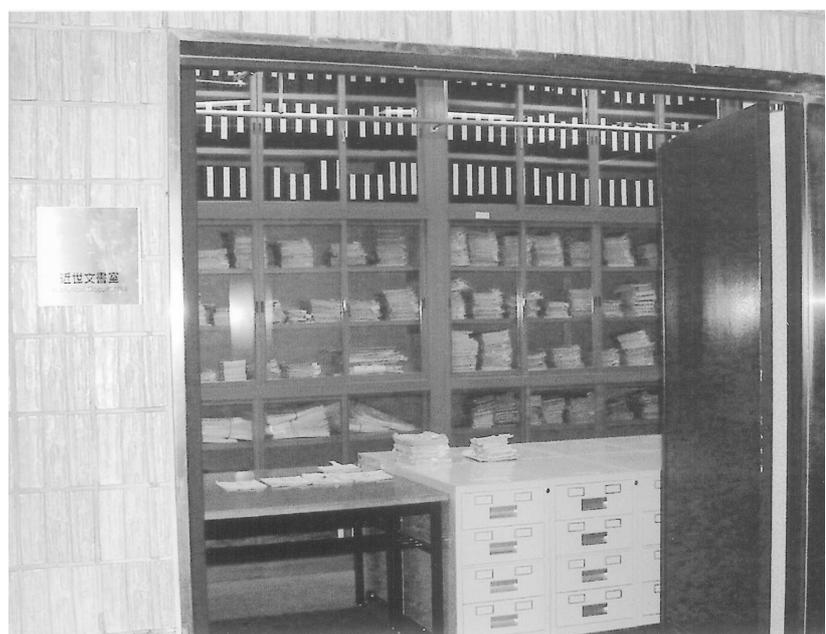
文政三年(1820)に赦免されて帰役。天保五年(1834)には十村制の廃止に伴い、射水郡惣年寄役となった。天保九年(1838)に再び退役と慎み方を命じられるが、天保十年(1839)の十村制復活により帰役、^{くによしぐみさいきよ}国吉組裁許となる。天保十四年(1843)には砺波郡御扶持人十村列となっている。川合家累代の中で最も激しい政治的激動に見舞われた人物と言えるだろう。十一代又右衛門は、文政九年(1826)に砺波郡無役年寄列となり、嘉永七年(1854)には国吉組

裁許となっている。十二代又右衛門は新川郡御扶持人天正寺村十次郎の次男として生まれたが、万延元年(1860)に川合家へ婿養子に入り、明治三年(1870)には国吉組裁許となっている。同年九月の十村制廃止により、里正となり、明治十二年(1879)には戸出村ほかの戸長となった。十三代鍋石は明治三八年(1905)に戸出郵便局局長に就任、大正三年(1914)まで勤めた。十四代禾は妻子を設けることなく昭和三八年に死去、ここに十村役川合家は断絶したのだった。

このように、加賀藩領の十村制の成立以前から、成立期、転換期、末期までを広範に俯瞰する上での第一級資料であるのは申すまでも無く、市町村議会制成立以前の近代地方政治を知る上でも、看過できぬ史料であると言える。

なお、本文書の目録は、データベース化の終了と同時に平成10年2月に冊子体も刊行され、学内外に配付し、研究者等に広くご利用いただいているが、その後一部重要文書については、科学研究費補助金でデジタル画像のデータベースへのリンク付けを行い、附属図書館ホームページからも検索機能を使い利用できるようにしている。

また、本年9月14日の本学公開事業「夢大学」において、一部を展示公開した。



貴重図書がおさめられている近世文書室

本学教官執筆図書案内

附属図書館では、本学教官が執筆した図書を積極的に収集しています。それらの図書は本館2階の専用コーナーに配架され、学生の皆さん等によって、有効に利用されています。新たに本を出版される際には、是非、図書館に2部ご恵贈くださるようお願いします。

ご寄贈いただいた図書は、『書香』及び附属図書館ホームページで紹介します。今回は平成14年7月以降の受入分です。

■ 自然科学

Continuous Exponential Martingales and BMO / Norihiko Kazamaki (理学部)
Springer-Verlag c1994 (410.8/L49/1579)

これならわかる微分積分学 / 風巻紀彦 (理学部) ほか著
科学技術出版 2001年 (413.3/K18/Ko)

マルチンゲール理論入門 / 風巻紀彦 (理学部) 著
エコノミスト社 2000年 (417.1/K18/Ma)

■ 芸術

アートは地域をつくる：講義録 in 富山インターネット市民塾 / 長谷川総一郎 (教育学部) 編
[編者発行] 2002年 (707/H27/Ar)

● 図書自動貸出装置の利用 ●

本年4月から、図書館本館で「図書自動貸出装置」が利用できるようになりました。

操作は、タッチパネル方式ですので、簡単です。

詳しくは、1階カウンターまたは図書館ホームページで。

(ただし、現在のところ図書館利用証が磁気カードでない教職員及び学外者は利用できません。)



1階カウンターに設置されている図書自動貸出装置

● 留学生用情報端末機を設置 ●

本年8月から、図書館本館及び工学専門図書室の留学生用情報端末機が利用できるようになりました。図書館速報でもお知らせしていますが、本館には英語版3台、中国語版2台、工学専門図書室には英語版1台、中国語版1台を設置しています。OSはWindowsXPで、インターネットエクスプローラー、ワード、エクセルが使用でき、キーボードは各国語版専用のものとなっています。

留学生をはじめとして、多くの方々に利用していただけるようお知らせします。



本館1階マルチメディアコーナーに設置されている留学生用情報端末機

図書館関係会議

(平成14年4月～8月)

◎ 学内関係

- 第1回富山大学年史編纂委員会
期日 平成14年4月9日
場所 附属図書館会議室
- 第1回附属図書館運営委員会
期日 平成14年5月17日
場所 附属図書館会議室
- 第2回附属図書館運営委員会
期日 平成14年7月24日
場所 附属図書館会議室

◎ 学外関係

- 第53回北信越地区国立大学図書館協議会
期日 平成14年4月25日～26日
場所 福井厚生年金会館
- 国立大学附属図書館事務部課長会議
期日 平成14年5月21日
場所 学術総合センター
- 国立大学図書館協議会理事会
期日 平成14年5月23日
場所 東京大学
- 第47回国立大学附属図書館協議会総会
期日 平成14年6月26日～27日
場所 鳥取県立県民文化会館

平成14年度附属図書館運営委員会委員名簿

(平成14年5月11日現在)

館長	山地啓司	工学部	袋谷賢吉
人文学部	藤田秀樹	工学部	石原外美
人文学部	内山純蔵	教養教育実施機構	松崎一平
教育学部	佐藤幸男	総合情報処理センター	村井忠邦
教育学部	徳橋曜	事務部長	東高明
経済学部	浅井尚子	情報管理課長	五十嵐輝雄
経済学部	若林丈靖	情報サービス課長	内山昭一郎
理学部	鈴木邦雄		
理学部	中村省吾		

「書香」は図書館ホームページへも掲載しています。

URL <http://www.toyama-u.ac.jp/tya/library/>



富山大学附属図書館報「書香」No.40

2002年10月15日発行

編集 富山大学書香編集委員会

発行 富山大学附属図書館

富山市五福3190

電話 076-445-6891 (ダイヤルイン)